

朝日 16.12.19(8)

救われず71年

空襲、見捨てられた民②

1944(昭和19)年7月7日、サイパンの日本軍が玉砕した。本土は米大型爆撃機B29の往復圏内になり、11日後、東条内閣は総辞職した。だが、この時、その後の空襲がいかにもごいものになるか、どれだけの国民が予想できただろう。

「あの頃、みんなで海に遊びに行ったんだ」。当時、旧制八高生徒だった大川浩正(90)は、交流のあった名古屋大生らとボートこぎに行った。その時、ときはき指示していた女性が、後の全国戦災傷害者連絡会長杉山千佐子だ。杉山は、名大医学部の研究補助員で20代後半。教授秘書や解剖も手伝い、和歌山県の新宮から出てきた大川には、まぶしい存在だった。

杉山は岐阜市出身。台湾、名古屋、東京を転々として育った。名大に職を得てようやく母、弟と3人の生活が安定した。勝ち気で、隣組の防火訓練ではバケツリレーの先頭に立ち、縄で編んだ的に向かって水を「命中」させるのが自慢だった。

その頃、学童疎開が始まった。東京の第1陣が出発したのは、8月4日。士気に影響する恐れや軍需工場の要員確保のため、政府は成人の疎開に消極的だった。



守閣影



米軍の攻撃で炎上する名古屋城天
=1945年5月14日、岩田一郎氏撮

名大総長渋谷元治も設備や学生の疎開を考えた。だが、「名古屋を死守せよ」と叫ぶ軍を前に、トラックや貨車の入手は困難。手をこまぬくうちに、米軍の市街地空襲が本格化した(「五十年間の回顧」)。

10万人が死んだ東京大空襲は45年3月10日。大本営発表は「盲爆により都内各所に火災を生じたるも……八時頃迄に鎮火せり」と素っ気ないものだったが、関東大震災を上回る死者を隠せるものではない。生前の杉山によると、東京大の電話連絡で惨状は伝わってきた。でも今更、それで何ができたか。12日に名古屋、13、14日大阪、17日神戸、19日、また名古屋が襲われた。そして24日。長野市に子連れで引越す姉(104)を見送った夜、自宅防空壕近くに250kg爆弾が落ちた。爆風と衝撃で土砂が崩れ、柱が落ち、体をはさまれた。このまま死ぬのか。母、弟と賛美歌を歌い、救出を待った。

名古屋城が炎上した5月14日空襲の時、杉山は病院の屋上にいた。両目に眼帯をしていたが、手のひらに灰が降ってきた。病院の周りで、積み上げた遺体を野犬がむさぼっていた(自伝「おみすてになるのですか」)。

(編集委員・伊藤智章)